

受賞者：綾織夢・希望のまち推進会（岩手県遠野市）
（旧：綾織町地域づくり連絡協議会）

天皇杯
受賞年：平成15年



むらづくりの経緯

- ・昭和54年、綾織町の各組織の長や行政区長を構成員とする新しい地域づくり運動の中心組織として「綾織町地域づくり連絡協議会」を設立。
- ・綾織町民総参加による市民運動を推進し、明るく住みよい豊かな郷土づくりを目的として地域課題解決のための活動を展開。
- ・令和3年4月1日、「綾織町地域づくり協議会」から「綾織夢・希望のまち推進会」に名称を変更し、住民主体の地域づくりを推進。

受賞当時

生産活動の特色

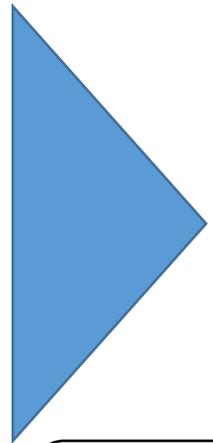
- 平成6年に農作業受託組織「あやおり夢現会21」を組織し、水稲作業と集団転作（大豆・小麦・そば等）作業を受託。
- 畜産農家と連携した資源循環型農業に取り組み、稲わらとたい肥の交換による土づくりの実践。

地域づくりの特色

- 日本で初めて、「田んぼの中の公衆トイレ」の設置を実現させた女性達は、「あやおり夢を咲かせる女性の会」を組織し、郷土料理の店「夢咲き茶屋」を開設。
- 「花街道あやおり実行委員会」を組織し、国道沿いに延べ8km、4万本のマリーゴールドの苗を植栽。
- 8月のお盆の時期には、地域の子供から高齢者まで一緒に手作りした灯籠「夢灯り」800基を設置し、映し出された「遠野物語かるた」の絵が帰省客を迎えている。
- 北東北3県から8種類の鍋と100名以上の参加者による「北東北ナベナベサミット」を開催。3県持ち回りによるイベントとなり、都市と農村の広域的な交流へと発展。
- 「綾織まつり」を開催することで、伝統芸能を披露する場が与えられ、世代間交流と地域の伝統芸能の伝承が活発化。

～受賞直後の効果～

- ・マスクミで取り上げられ、来訪者増加
- ・地域特産物の売上げが2倍に増加
- ・受賞が励みとなり活動が更に活発化
- ・地区センター利用者の増加



現在

評価ポイントの取組状況

- 地域内にある国の重要文化財「旧千葉家住宅」は、令和10年のグランドオープンに向けて保存修理工事を行っており、文化財を活用した地域づくりについて「重文千葉家の活用を考える会」とともに話し合いを行っている。
- 「あやおり夢現会21」は、地域の中心経営体として生産活動を展開。
- 「あやおり夢を咲かせる女性の会」は、定例会や研修会を行っている他、郷土料理の店「夢咲き茶屋」は、来客数、売上が増加している。
- 「花いっぱい運動」として、地域の主要個所に6,600本ほどのマリーゴールドの苗を植栽し、地域の環境美化と住民交流を図っている。
- 「綾織町新春のつどい」は、新たに町民相互の世代間交流と郷土芸能発表の場として開催。
- 地域の屋号や由来をマップにし、子どもたちへの伝承活動を新たに実施。
- 地域支えあい事業として、買い物支援、高齢者宅の草刈り・除雪を展開。

今後の展開

- 新たなほ場整備事業導入の合意形成に向け、話し合いを行っていく。
- 国の重要文化財である「千葉家住宅」の地域づくりへの活用や高齢化社会に対応した「地域支え合い事業」のさらなる展開など、明るく住みよい豊かな郷土づくりを目指し活動していく。



受賞者：小川区（岐阜県郡上市）

むらづくりの経緯

○小川区は、旧明宝村（現：郡上市）の北東部に位置し、旧村の中心部とは交通難所である「小川峠」で隔てられている。地区住民のまとまりは良く、「全員参加のむらづくり」をキーワードに、自治組織の「小川区」を中心に、さまざまな組織が連携しながら地域活動が進められてきた。
○むらづくりの直接のきっかけは、昭和47年の「小川小学校での花壇づくり」である。子供たちが通う学校を少しでも良くしようと、父兄が地区内から資材を調達し、学校の玄関脇などに花壇を作った。その花壇づくりが全国表彰されたこと等を契機に、「学校から地区全体に活動の輪を広げよう」という意識が住民の間で盛り上がり、地区内各所への花壇づくりに発展し、むらづくりのシンボリック的存在となった。

受賞当時

生産活動の特色

○地区の寒暖差、清流を活かした、「おいしい米づくり」に取り組み、消費者から好評を得ている。
○農産加工グループ「こぶしの里」は、女性会員3名で組織し、だいこんの漬物、山菜の総菜等、8種類の農産加工品を生産している。

地域づくりの特色

○自治組織である「小川区」を中心に、多数の団体が互いに連携しながら、むらづくりを進めている。住民は身近な団体の活動に楽しみながら参加することで、自ら考え、行動する「全員参加のむらづくり」が行われている。
○父兄が小川小学校で始めた花壇づくりが地区内に広がった。また、平成12年から花桃の植栽を始め初年度2千本、平成15年には3千本が植栽され、春にはピンクと白の花桃が咲きほこる。
○子供たちのためのスケートリンクづくり、神社の参道の階段が急で、高齢者が登れるよう整備した遊歩道等、ぬくもりが感じられるむらづくりを進めている。
○平成15年に開設したコテージ「小川きの里」は「小川ふるさと活性化協組合」が管理し、宿泊や農業体験ができ都市住民との交流につながっている。

～受賞直後の効果～
・地区住民のモチベーションが高まった。
・新たに団体を創設するなど、自ら行動する姿勢は現在に継承。



「こぶしの里」のクッキー



手作りのスケートリンク



リピーターが多いコテージ「小川きの里」

現在

評価ポイントの取組状況

○販売目的の水稻の作付面積は、受賞当時から5.5ha増加した。3ha(H12)→8.5ha(R5)。平成26年から、「日出雲(ひづも)のめぐみ」としてブランド化し、道の駅等で販売している。
○農産加工グループ「こぶしの里」では、漬物等に加え、平成29年から焼き菓子、クッキーを生産販売し、明宝地区のお土産として好評。販売額は受賞当時から倍増している。(100万円(H15)→200万円(R5)) 今後は、小川産米粉を原料とした菓子の開発に取り組みむ。
○平成24年に営農組合を設立し、地域内で生産された米の乾燥・調整作業に取り組んでいる。
○3千本以上の花桃が咲く4月に、「小川はなもも祭り」を開催し、200名もの訪問で賑わいをみせている。また花壇づくりも規模縮小し、継続・実施している。
○「小川きの里」では夏にバーベキュー、川遊び、冬にスキーを楽しむ客が利用し、関西方面からの利用者が多い。



ブランド米
「日出雲のめぐみ」



小川はなもも祭り

今後の展開

○小川区で取り組んできた米のブランド化を、明宝地域全体で取り組んでいく。
○植栽した「花桃」を維持管理し、さらなる植栽を地区住民と協力して推進する。
○「めいほうトンネル」開通(R3)以降、小川区への訪問が便利になり、都市からの来訪が期待される。今後はイベント等の情報発信により関係人口の増加につながるイベント等を企画する。
○来訪する関係人口が移住・定住につながるよう行政と連携して推進する。
○合同会社小川エコビレッジ(住民で全額出資)により水力発電所を建設し、売電収入を小川区活動費及び営農に活用する計画を推進する。(R6～)

受賞者：豊永支え合いネット（岡山県新見市）
（旧：豊永開発振興会）

日本農林漁業振興会会長賞
受賞年：平成15年



むらづくりの経緯

- ・山村地域における過疎化、後継者不足の問題を解決し、地域を活性化しようと、地域内のあらゆる組織、機関を構成員または協力機関として、ピオーネ等特産品の生産振興、地域内外の人を集めた様々な交流イベントの開催、文化活動や美化活動等総合的な地域振興を図った
- ・集落単位のものになりがちな地域活動を、20年の長期にわたり、300戸を上回る広い範囲で展開し、専門部を設け、話し合いによって地域振興を進めてきている。

受賞当時

生産活動の特色

○ぶどう(ピオーネ)が中心作目、販売額も年々増加し、平成14年度には、3億円に達し、県下有数の産地。
○その他では雨よけ夏秋トマト、肉牛、もも等が生産の多い作目。
○市内では農業生産の盛んな地域であることから、専業農家率も23%と高い。

地域づくりの特色

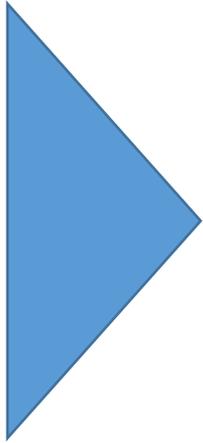
○平成4年には、地域拠点施設として「豊永構造改善センター」が完成、各種交流・スポーツ行事や調理実習などに活発に活用。
また、平成6年に地区内の観光資源である満奇洞(鍾乳洞)周辺整備で「ふれあいセンター満奇」が完成、地域資源の紹介、特産品の加工・販売、特産品祭り等を行い、地域内外の交流を図った。

○観光に訪れる人々による空き缶、ゴミの投げ捨てが目立つことから、婦人部、生徒による空き缶拾いなどを実施。
また、地域・家庭の環境整備運動として、沿道・観光施設への花の植栽、花苗の配布なども実施。

○平成13年度から高齢者を対象に、「豊永ふれあいサロン」と称して、ボランティアの方々の協力により年10回健康講話・健康体操などの講座を実施。
また、生涯学習運動の展開として、絵画教室をはじめ14の教室を開いており、約300人の地区民が参加。

～受賞直後の効果～

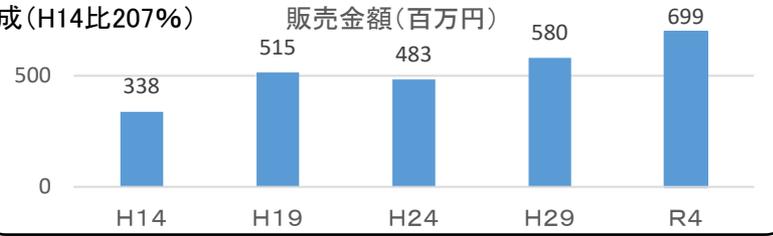
- ・マスコミで取り上げられ、来訪者が増加
- ・受賞したことで、地域の一体感が深まった



現在

評価ポイントの取組状況

○小規模多機能自治に取り組む市内で13番目の地域運営組織に移行(令和4年5月)。
⇒「助け合いの豊永」を目指し、新たに構成した地域振興、環境・安全、健康・福祉、教育・文化の4部会で、ふれあいピオーネ祭り、カタクリウォーク、地区住民運動会、歴史探訪等の活動に取り組んでいる。
○「ふれあいセンター満奇」「ピオーネ交流館」を活用して地区内外の人々の交流機会を創出。見学や体験により、ぶどうの担い手確保が進む。
⇒Iターンの新規就農者は平成14年以降累計11人。ぶどう部会全体26人の44%を占める。
⇒ピオーネの販売額は年々増加し、令和4年度には約7億円を達成(H14比207%)



今後の展開

○ピオーネを核にした新規就農者並びに園地確保による産地の持続発展。